フランス・ジュラの家族制農業における農家の意思決定 ——ジュラ・モデルによる酪農経営の社会的コンセンサスの基盤——

Decision Making of Family-Based Farms in French Jura

三浦 敦*

Atsushi MIURA

This paper illustrates that the modern agriculture in French Jura has developed through the "Jurassian model", run by family- and community-based farms without intensification. A case study of the village F is presented and how family-based farms adopt this model and how the model becomes a social consensus is examined.

Milk production in Jura is strongly conditioned by nuclear family (as unit of production), kinship relations (for land transaction), and cooperation with community members. The analysis of village conflicts and family conversations on farm management shows that these conditions influence people's decision making processes over farming, and that people constantly affirm their family and economic values through such processes. The Jurassian farming model becomes established through farmers' relationships and daily discussions with neighbors and kinsmen who share the farming experience and values. Family ties significantly contribute to the increased economic efficiency of the farm, and it consequently leads farmers to adopt the model. The paper concludes that the particular local conditions of Jura region lead its villagers to accept the Jurassian model-based farming as a social consensus due to its economic efficiency.

1. はじめに

ヨーロッパ農業は第二次大戦後、経済発展と共通農業政策の下で大きく変化した。しかしヨーロッパ各地での農業近代化は一様ではなく、規模拡大と集約化を目指した地域がある一方で、それとは一線を画す農業経営を目指した地域もあった。本稿で取り上げるフランス東部のジュラ山脈の酪農地域は後者にあたる。Perrier-Cornetはその農業形態を「ジュラ・モデル」と呼んで、規模拡大・集約化による「集約化モデル（ブルターニュ・モデル）」と対比し、中規模家族経営と伝統的な共同体秩序に支えられたジュラ・モデルは、農業個人主義が農業近代化を促したとするブロックの議論と食い違おうと指摘する（Perrier-Cornet, 1986, p.69; cf. ブロック, 1959）。とはいえジュラ農民はそれぞれが独自に農業経営の

意思決定を行っており、「伝統的秩序」に盲従している訳ではない。本論の目的は、集約化を回避する農業経営の例としてジュラ・モデルを取り上げ、どのような意思決定により、ジュラ・モデルが市場経済下の農民たちに採用され広く共有されているのかを、ジュラ県中部のF村を事例として、農業経営の社会的条件の検討を通して明らかにすることである。

フランス・ジュラはフランシュ＝コンテ地方東部の石灰岩質の高原で、農業は加温圧搾タイプのコンテ・チーズのための酪農に特化し、小さなチーズ組合で大半のコンテを生産している。Perrier-Cornetは、集約化モデルが高生産性の牧草と乳牛種（ホルスタイン種）、最新のチーズ製造技術の利用を特徴とするのに対し、ジュラ・モデルはサイレージをしない粗放的草地利用やこの地方独自の乳肉兼用牛（モンベリアルド種）、伝統的チーズ製造技術の利用といった特徴を持ち（Perrier-Cornet, 1986, pp.70-71）、その背景としてチーズの共同生産や共有地の利用と

* 埼玉大学

いう共同体的慣習と、農業の家族経営の特徴を指摘する (Perrier-Cornet, 1986, pp.66-67) ⁽¹⁾。その上で、一定規模 (1980年には保有頭数15頭) 以上の農家は技術的にも経営的にも同質的で、そこには農業経営を巡る一定の社会的コンセンサスがあると述べている (Perrier-Cornet, 1986, pp.84-88)。

ジュラ・モデルはすなわち、規模拡大と集約化による生産性向上は追求しない中規模酪農経営のモデルである。実際、フランシュ＝コンテ地方では1988年において、酪農を行なう農業経営体のうち飼育する乳牛が50頭未満のものが93.7%に上っている (Ministère de l'Agriculture et de la Forêt, 1990)。F村でも飼育頭数は30～70頭となっており、農民たちは「ここではオランダのような大規模な酪農は無理だ」とそれ以上の規模拡大は望まない。しかし、彼らは市場経済から離れたところで固定的な慣習に埋もれて農業を営んでいる訳ではない。ジュラ農業は19世紀前半から市場経済の中に取り込まれてきており、その市場経済への適応に際して農家はむしろ独自に意思決定を行なってきたのである。

ここで用いるデータは、1990～1992年のF村での現地調査データと、関連統計・文献資料である。F村は標高500メートル前後の平坦なカルスト台地にある、ジュラでは平均的な人口67人の村である。以下ではまずF村の農業経営の社会的基盤をみた後、農家の意思決定の実際を検討し、ジュラ・モデルがどのようにコンセンサスとなるのかを明らかにする (以下、人名はすべて仮名である)。

2. 農業経営の社会的基盤

(1) 家族と農業経営

フランシュ＝コンテ地方の農業は、労働力の92%を農業経営者とその家族に頼る家族経営による (Ministère de l'Agriculture et de la Forêt, 1990) ⁽²⁾。そこでまず家族を見てみよう。

ジュラでは2～3階建ての石造りの家が一般的で、1つの世帯は1つの玄関と1つの台所 (カマド) を共有し、建物が同じでも玄関が異なれば別の世帯と見なされる。結婚後の居住規則は新居居住が一般的なためほとんどの世帯は核家族で、F村でも19世紀から核家族が主流だった (表一1、表二2)。とはいえ

表一1 F村の家族形態と婚姻 [Laslett (1972) の分類法による]

	1856	1876	1911	1926	1991
単独居住*	7(12.3%)	7(12.3%)	11(22.4%)	10(23.3%)	2(8.3%)
核家族	37(64.9%)	33(57.9%)	26(53.1%)	25(58.1%)	21(87.5%)
直系家族**	5(8.7%)	6(10.5%)	5(10.2%)	3(7.0%)	1(4.2%)
その他	8(14.1%)	11(19.3%)	7(14.3%)	5(11.6%)	0(0.0%)
夫婦の合計		39	28	25	20
村内部での結婚		22	6	4	3
周辺の村との結婚		9	12	11	5

*: 単独居住は、配偶者に死なれた者と結婚前の若者のみである。

** : 直系家族は、裕福な家族のみである。

(Fichier de familles de la commune de F.による)

表二2 F村の農業経営体

経営形態	構成員 (続柄)	出生	妻の職業	備考
A 家族経営	ミシェル・A	1937	カテシスト	両親は他の村に
B 家族経営	フィリップ・B	1947	(農業)	父はもう働けない
C 家族経営	ダニエル・C	1943	(農業)	父はすでに死亡
D 家族経営	ピエール・D	1937	(農業)	常に父と働く
E GAEC	アラン・E (兄) イヴ・E (弟) アンドレ・E (母)*	1959 1960 1937	(独身) 郵便局員	父は死亡
F GAEC	ローラン・F (兄) アンリ・F (弟)	1964 1957	会社員 小学校教師	常に父と働く
G GAEC	アルフレッド・G (兄) ジャン＝ルイ・G (弟) ブリジット・G (弟の妻)**	1943 1949 1955	(独身) 共同経営	母は死亡 父はもう働けない 結婚前は事務職
H GAEC	ジャン＝マリー・H (兄) ドミニク・H (弟)	1958 1959	小学校教師 会社員	常に父と働く

*: 民宿 (Chambre d'hôte) も経営し、そちらを担当。

** : キャンピングと食堂 (Table d'hôte) も経営し、そちらの会計を担当。
(1991年の調査ノートによる)

日常生活では世帯を超えた親族間の協同が常に行なわれ、世代間の交流も盛んである。例えば食事では、フィリップ・B (農業経営体B) は妻と娘と住んでいて、実の両親が同じ建物の二階にある別の家に住んでいるが、日常の食事は二階の両親と一緒にとっている。また妻と住むピエール・D (農業経営体D) も、食事はいつも隣の別の棟に住む父ととっている (ピエールの3人の娘は大学生で他の地方に住む)。親戚が他の村に住んでいたり子供が遠くの町に住んでいたりする場合も、週末は祖父母の家によく集まるため、イトコの範囲までは頻繁に会うことになる。

ジュラ農民の多くはカトリック信者だが、このイトコまでの範囲の親族は日常の協同だけではなく宗教上の年周儀礼 (復活祭、クリスマス、万聖節) や人生儀礼 (洗礼式、初聖体拝領、結婚式、葬式) でも中心的な役割を果たす (図一1参照)。この時、カトリック儀礼は神との関係により個人に霊的人格を与えるので、個人の通過儀礼への親族の参加は、親族が個人の人格形成に本質的役割を果たすことを意味する (cf. 三浦、1998、456頁)。そのため家族生活の軽視は自らの宗教的人格も貶め、そうした態度は他人への嫉妬に起因するものとして周囲の非難と軽蔑を招く (三浦、1998、458頁; 三浦、2004、38～39頁)。

ジュラの農業経営はこの家族を基礎とする (表一

2)。F村には農業経営体は、家族経営が4つ、GAEC（共同営農集団）が4つあり、それぞれの代表例が農業経営体BとHである（表－3）。GAECとは1960年代からフランス政府が農業の規模拡大のために支援した、複数世帯による独自資本を持つ営農集団で、F村のGAECはみな別々に住む兄弟同士で作られている。農業経営体G以外のGAECでは、妻たちは村外で賃金労働に従事し昼間は村にいないため⁽³⁾、村で農作業を行なう兄弟と小学校に通うその子供たちには、その兄弟の母親が昼食を用意する（小学生は昼食をいったん自宅に戻って家族と一緒にとる）。そのため朝食と夕食は核家族でとるが、昼食は兄弟とその両親およびその兄弟の子供たちの3世代が一緒にとる。また農業経営体FとHでは兄弟の父親も一緒に農作業をしている（農業経営体Eでは父はすでに亡く、Fでは父は体が弱って農作業はできない）。法的にはGAECは兄弟で作る必要はないが、ジュラでは兄弟で作られることが多く、農民たちはその理由を相互理解と協力が容易だからと答えている⁽⁴⁾。しかしGAECのメリットについては、彼らは銀行から借入れがしやすいと言うにとどまる。フランスの他地域でよく聞かれる、休みの取りやすさや規模拡大によるコスト削減効果は特にメリットとはみなされていないが、それはGAEC以前から家族が日常的に協力してきたからであろう。

農業経営の継承も家族を単位とし、父から1人（長男が望ましいが必ずしも長男ではない）ないし2人の息子へ継承される⁽⁵⁾。息子がいない時や息子たちが農業を継がないとき、農業経営は娘の夫に継承されたり（農業経営体Bの例）、甥などの親戚に継承されたり（農業経営体Fの父の例）、あるいは離農したりする（農業経営体Dの娘の例）。農業経営の継承は単なる職業の受け渡しではない。ジュラ農民の継承を分析したJacques-Jouvenotは、農業経営の継承はその地の農業に関わる身体化された経験的知識と家族の歴史的記憶という⁽⁶⁾、家族の遺産patrimoineの継承であると指摘する（Jacques-Jouvenot, 1997, 60～63; cf. Salitot, 1988, 212）。F村も同様に、農業経営の継承は経済活動とともに経験的知識と家族の記憶の継承ともなっている。

このようにジュラ農業が家族を基礎としている背

図－1 通過儀礼と親族（1991年の調査ノートによる）

表－3 F村の2つの農業経営体の土地利用形態

経営体	B	H
経営形態	個人経営	GAEC
経営面積	70 ha	120 ha
乳牛保有頭数	40 頭（うち 15 頭は シャロレー種との雑種）	70 頭
輪作サイクル	5 年	7 年から 15 年 （なるべく長く）
1 年目	小麦	トウモロコシ、オート麦
2 年目	大麦	トウモロコシ、オート麦
3 年目	トリティカル	大麦、小麦、テンサイ
4 年目	草地	大麦、小麦、テンサイ
5 年目	草地	大麦、小麦、テンサイ
それ以降		草地
土地利用	放牧地 25 ha 採草地 35 ha 小麦 2 ha 大麦 3 ha トリティカル 2 ha オート麦 30 a	テンサイ 3 ha トウモロコシ 4 ha 小麦 3 ha 大麦 5 ha オート麦 3 ha

（1991 年の調査ノートによる）

景には、家族内部での信頼関係と記憶・知識の共有がある。こうした家族内の信頼関係はさらにその周囲の親族に拡大され、次に示す農地の取引にみられるように、農業経営で重要な役割を果たしている。

(2) 相続と土地取引

土地は農業の基盤である。ジュラではフランス革命以前より大地主は少なく、農地の多くは小土地所有農民の所有地や共有地だった（Mayaud, 1986, p.63）。19世紀末からは大地主も土地を手放し始め、20世紀を通じて小農民たちは、土地を手放した大地主や離農した小農民の土地を購入して規模を拡大し、こうして農業経営規模は平準化していった（表－4）。農民の所有地は、父が農業を引退する頃に他の財産と合わせて子供たちに分割相続される⁽⁷⁾。この時、財産は性や年齢を問わず均等に分割されるのが理想とされ、子供たちも相続を単なる所有物の分配という以上に、親子関係の確認と兄弟関係の平等性の確認として重要視している。しかし土地を単純に分割するだけでは農業を継承しても農業経

表一4 F村の土地所有構造の変化

	1913		1920		1930		1940		1948		1975	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
0 - 1 ha.	92	14	94	14	98	14	80	8	79	7	68	15
1 - 2 ha.	45	17	47	16	40	16	30	7	31	5	22	3
2 - 4 ha.	39	10	35	9	33	16	30	11	31	9	36	2
4 - 6 ha.	11	6	11	6	14	6	18	9	22	7	8	1
6 - 8 ha.	5	5	6	6	7	5	11	8	11	10	3	-
8 - 10 ha.	9	7	7	4	3	3	5	4	6	3	3	1
10 - 12 ha.	3	3	5	5	5	5	2	1	1	1	6	5
12 - 14 ha.	-	-	-	-	2	2	3	3	1	1	-	-
14 - 16 ha.	1	1	3	2	1	1	1	1	2	2	3	3
16 - 18 ha.	2	2	2	1	1	1	2	1	1	1	2	2
18 - 20 ha.	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	2	2
20 - 25 ha.	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	2	2
25 - 30 ha.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
30 - ha.	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	208	65	210	63	206	70	184	53	186	46	157	38
A : 土地所有者数 B : F 村の土地を所有する F 村住民数												
(Matrice cadastrale de la commune de F.による)												

営は不可能になってしまう。そこで次の3つの戦略のどれかが採用される。どれが採用されるかは、家族の話し合いと相続する子供たちの財産利用法によって決まる。

財産の平等な分割 子供の間の平等性を重視し、農地を含めた全財産をその質や場所まで考慮して均等に分割し、その上で農業を継ぐ子供が継がない子供から土地を借りる。

財産の不平等な分割 全財産を均等に分割するが、その際、実際に使う農地（家屋の近くの土地）は農業を継ぐ子供が相続し、それ以外の子供は遠い土地や動産を受け取る。

財産の平等な分割と遺産の買い取り 財産を均等に分割した後、農業を継ぐ子供が他の子供から必要な土地を買い取る（この場合、実際は現金のやり取りだけがなされる）。

しかし相続だけで生計に必要な土地をすべて手に入れることはできず、相続地も農業に向いているとは限らない。また長年の均分相続により細分化され分散してしまった農民の所有地は、効率的農業経営には適すとは限らない。そこで、必要な土地にアクセスするために土地取引が必要となる。購入はそのための重要な手段で、農業経営体Aのミシェルは、F村に土地を購入して外部から移入してきた農民であった。しかしそれ以外にも借地と土地用益権の交換という方法がある。それぞれについてみてみよう。

購入 近隣の土地所有者のうち農業経営を行なう意思のない者や離農者から購入される。

借地 離農者や、農業に向かない場所に土地を持つが土地は手放したくない者は、その土地を貸し出す。

地代は、県の指導により一定の牛乳生産量（1991年では200l）に対応する市場価格を超えられない。借地契約は9年毎に更新されるが、実際は借り主が農業を続ける限り契約は常に更新される。

交換 酪農を行なう2人の友人や近親が互いに相手の経営に有利な場所に土地を持つ時、土地の交換が行なわれる。これは、面積のみを考慮した口約束による用益権の等価交換で、面倒な法的手続きを省くことができる。

この3つの手段を様々に組み合わせることで、望む土地にアクセスができる。農業経営体Eによるこうした土地取引の例が図一2である。この図からは、農民は土地取引を通じてまず土地を牛舎の近くにまとめようということがわかる（牛舎からの距離が長いと時間のロスと泌乳量の低下を招く）。しかし常に1つの場所にまとめる必要はない。むしろ穀物の栽培地や採草地は多少離れていても質の良い土地（表土の厚い土地）であることが望ましく、また子牛の放牧地や草地も住居に近い必要はまったくない。また気候上の理由から土地はある程度拡散していたほうがリスク分散に都合が良い。そこで、土地の質と距離を勘案して上記の3つの手法を使えば、柔軟かつ効率的に土地を配置することができる。それでは、実際の土地取引はどのようになされるのだろうか。3つの事例を見てみよう。

事例1 農業経営体Eの兄弟のイトコ（父の兄弟の息子）のジルベールは、F村で酪農を営みコミュニケーション議員にもなったが、近くの村に住む農家の娘と結婚し、妻の実家の経営規模のほうが大きかったので妻の村に住むことにした。そこで、ジルベールがF村に持つ不要となった土地は、経営規模の拡大を考えていた農業経営体Eのイヴに売った。イヴに売ったのは、彼がイトコだったために始めに話を持ちかけたからである。

事例2 農業経営体Fは、その経営地の約半分は親族から借りたものである。親族に借りるのは、相続によって細かく分割される前で土地がまとまっていたことと、親戚の土地は自分たちの土地のすぐ近くにあることが多く、これらの土地を借りれば経営の効率性を追求できるからで、そうでなければ他の人から借りていた。

事例3 農業経営体Gのジャン＝ルイは、他の農業を継ぐ意思のない兄弟が相続した土地を買い入れ、土地の細分化を防ぎ経営規模を維持した。

ベルナール・E: 父の父方イトコで近くの村に移り住む (イヴの妻はその村出身)
 ミシェル・E: 父方オジ アルフレッド・G: 母方オジでF村の農民
 ドミニク・H: F村の農民 シャルル・J、ミシェル・L: F村の住人 (すでに引退)

(1991年の調査ノートによる)

図一2 F村での農業経営体E (GAEC) の土地取引と主な取引相手

表一五 耕作地の由来 (ha)

農業経営体 D		農業経営体 G	
相続地	5	相続地	4
購入地	15	4	兄の土地
	10	4	弟の土地
		15	兄が妹の夫の母方オジから
借地	10	16	弟が他の兄弟姉妹から
	8	5	兄がその他から
	3	10	引退した村人から
	1	18	その他から
	8		

(1991年の調査ノートによる)

以上の例から2つの特徴が明らかになる。土地取引における親族の優先性と、均分相続による高い土地流動性である。そしてこの2つは密接に関連している。つまり、耕作地の大半を近親から調達する農業経営体Eの例にみられるように、均分相続によって土地は分散するが、世帯を越えた親族間の取引が優先されることで土地流動性が生まれる(表一五)。そして農民が自分の経営方針に応じて、相続地以外の(必ずしも先祖の土地でもない)土地にアクセスすることで、耕作地は再編されるのである。

この親族の優先性は、日常的な付き合いや儀礼への参加で生まれた親族間の信頼関係に由来し、これにより農民は低い取引費用で望ましい土地への安定的なアクセスが保証されてリスク分散も容易になるため、親族関係は生産活動の不可欠の基盤となる。均分相続は近代的な農業経営にはマイナスと言われるが、F村の場合はむしろ親族の信頼に支えられて土地取引を容易にするため、より柔軟な経営を可能にしているのである⁽⁸⁾。

(3) 乳牛とチーズ生産

ジュラの酪農の特徴は、モンベリアルド種による牛乳生産とその牛乳を用いたコンテの生産にある。それらはともに、品種改良を行なう飼育組合と協同生産を行なうチーズ組合という、ジュラの共同体的伝統とされる農民たちの地域協同組織を基盤としている。

モンベリアルド種は19世紀初頭にこの地方で生まれ普及した乳肉兼用牛で、19世紀末には各村に作られた飼育組合を通じて血統管理と品種改良が始まった。第二次大戦後には飼育組合は地域全体の組織へと統合され、モンベリアルド種の泌乳量も急速に伸びた(例えば農業経営体Hには年間8,000ℓ以上を生産する個体もいる)。こうして自ら育ててきたモンベリアルド種を、農民たちは「俺たちの乳牛 nos vaches」と呼ぶ。彼らはその経済的利点として、オスの子牛が肉用としても価値があり、メスの泌乳

年数も10年以上になるという点を上げており、リスク分散効果を評価しているといえよう(農業経営体Bは肉用牛のシャロレー種との交配を行なったが、それもリスク分散が目的である)。

生産された牛乳は、農民たちが「俺たちの組合 notre coopérative」と呼ぶチーズ組合に集められる。中世

後期に起源を持つジュラのチーズ組合は、19世紀に各村で次々と結成されていくが⁽⁹⁾、19世紀末以来の農業経営規模の平準化は、経済格差からくる農民間の利害対立を少なくして協同の条件を整え(Miura, s.d.)、チーズ組合の発展に貢献した。今日でもジュラ県の牛乳集荷量の92.5%は、その大半が20人以下の組合員からなるチーズ組合に持ち込まれたものである(Ministère de l'Agriculture et de la Pêche, 1993)⁽¹⁰⁾。そして自分の村にチーズ組合があるときは通常、農民たちは自分の村の組合に加入する。コンテはAOC制度により製造方法が規制され、特にチーズの品質を台無しにする酪酸菌を発生させるサイレージ飼料は避けられ、このことがコンテの高い品質を保証している。またコンテはフランスで最も消費されるチーズの1つであり、この高品質・高需要が、彼らの「俺たちのチーズ notre fromage」という言い方に現われるプライドを支えている。

「俺たちの乳牛」と「俺たちの組合」による「俺たちのチーズ」の生産という地域の特性へのプライドは、近隣関係や地域協同組織と不可分の関係にある。例えば、1人でも質の悪い牛乳(例えば酪酸菌の混入した牛乳)をチーズ組合に持ち込めば、その組合の生産するチーズはすべて価値をなくすので、高い経済的価値の維持のために、地域協同組織は農民たちに一様に共通の生産条件を課すことになり⁽¹¹⁾、個々の農民も互いに周囲の農民の生産活動にも関心を持つ。しかもLaytonが指摘するように、ジュラでは重要な農業情報は様々な公共メディアよりも、親族や友人間との議論を通して伝達されるが(Layton, 2001, pp.236-243)、チーズ組合などの地域協同組織はそうした情報交換の場となっており、人々はそこで議論を通じて新たな情報を得、意見とプライドを共有していく。こうしてチーズ組合は高い経済性を実現することで、家族と市場の中間に立って市場の圧力を弱め、家族経営農家の存続に貢献する(三浦、2001、11頁)。この時、意見を共有しやすい小さなチーズ組合のほうが、私企業や規模の

大きな組合に比べて「俺たちのチーズ」というプライドに見合う高い品質を実現しやすいため、小さい協同組合は組合員の生産する牛乳に対して高い価格を払うことが多くなる。そしてまた、このような高い品質を実現するための乳牛飼育や酪農経営を巡る知識は、家族で代々継承される家族遺産ともなっていく。

しかし地域協同組織が行き詰まることもある。F村のチーズ組合はその例である。F村ではかつてはみなF村のチーズ組合に属していたが、1988年に経営に行き詰まり組合は解散した。そして農業経営体Aは近くの町ポリニーにある国立乳業学校に⁽¹²⁾、Bは隣村のチーズ組合に、C、D、F、Hは近くの村に新しくできたチーズ組合に、そしてEとGは隣の県の大きなチーズ組合にそれぞれ出荷することになったが、その時、牛乳価格が高いこと、組合の経営に自分たちの意見を反映できること、そして友人関係や親族関係などのつてをたどれることが、出荷先選択の基準となった。ここではまた、個々の農業経営体の経営方針も関係した。例えば農業経営体Eのアラン・Eは、「F村にチーズ組合があれば、そのメンバーになるのが当然だ」と言いつつも、一方でサイレージ飼料の利用（すなわちコンテではなくエメンタールのための牛乳生産）というアイデアも持ち、「でもF村のチーズ組合はみんなで解散することにしたんだから、後は俺たちで好きなようにするさ」と言って、知り合いを通じてエメンタールも製造しているチーズ組合を出荷先に選定した。こうして村のチーズ組合が解散しても友人や親族をたどって別のチーズ組合に加入することで、農民たちは実質的な損失を回避できたのである（三浦、2001、17頁）。

このように地域協同組織は、村という近隣関係を基礎に親族関係と友人関係で支えられている。そしてその中で情報が流通して意見形成が方向付けられ、他方でこれらの組織は農民の生産活動に一定の条件を課すことで、高い生産性を実現しているのである。

3. 意思決定と社会的コンセンサス

(1) 農業経営と派閥

ジュラの農民の生産活動は、家族、家族を超えた

図-3 交換分合への賛否と村長を巡るF村の派閥
(1991年の調査ノートによる)

親族、そして地域協同組織を基盤とする。それでは彼らはそこでどのように意思決定を行ない、その意思決定はどのようにジュラ・モデルという社会的コンセンサスに至るのだろうか。村内部での意思決定とその社会的基盤の関係をみるために、F村の交換分合を巡る紛争事例を検討してみよう。

均分相続による土地細分化の解消のために、ジュラでも交換分合は長年議論されてきたが、先祖伝来の土地を守りたい農民の反対で実行されないことも多かった。F村もそうした村の1つだったが、外部から移入してきたフランソワ（農業経験のない退役軍人）が1988年に村長に選出されると、彼は交換分合が村に不可欠と考え、その実施をコミュニティ議会に諮った。この時、8人の議員の間で賛否が割れたが、村長が賛成票を投じて実施が決定された。農民たちによればこの時の意見対立は、1980年代のF村のチーズ組合を巡って表面化した牛乳の生産方針の世代対立の再現であった。1980年代には、旧世代は乳価を牛乳の量のみで決めるべきだと主張し、新世代は牛乳の質も考慮して決めるべきだと主張して対立したが⁽¹³⁾、交換分合では旧世代は「家族の土地」という家族的価値を唱えて反対し、新世代は経営的合理性という経済的価値を主張して賛成したのである。この対立はさらに村長のフランソワの他の施策への賛否と重なって感情的となり、1991年末になってもこの対立は解消しなかった。ここで反対派と賛成派の人間関係をみてみよう（図-3）。

反村長・反対派の中心は前村長で1903年生まれのシャルルである。彼は1962年から20年以上もF

村の村長として強いリーダーシップで村を運営したのみならず、戦後の農業の近代化を担ったという強い自負を持ち、いつも息子と農作業をしていた。そして次の村長に息子のピエールを望んだが、選挙でピエールが「他所者」のフランソワに負けたため、それ以来フランソワを敵視していた。また父親譲りの家父長的性格の持ち主で、90歳近い1990年でも息子たちの家族生活を監督していた。農業経営を別にするシャルルの甥・姪の家族も、祝祭日や家族の誕生日にはいつもシャルルやその息子の家に集まっていた。この時、シャルルを中心とした家族の頻繁な付き合いとシャルルの強い性格により、彼の反村長の立場は家族に共有され、息子たちの農業経営方針も方向付けられていた。1917年生まれでコミュニケーション議員のフレデリックなど同世代の他の村人もまた、シャルルとも仲がよく頻繁に意見交換をし、交換分合にも反対であった。とはいえ1990年代には、彼らは高齢のためにすでに農業は引退しており、農業経営への発言力は低下していた。

同様の家族のまとまりは農業経営体Hにもみられる。彼らは交換分合自体には賛成だが、他所者であるという理由で村長を敵視していた。この時、農業経営体Hの兄弟は親村長・賛成派と同世代で、農業情報は友人関係や親村長派の村人から得ていたが、その意見形成の中心にいたのは父親のジャンであった。ジャンは自己主張が強く昔からシャルルと対立してきたが、意見形成で父が家族に強い影響力を持つ点ではシャルルと同様だった。

一方、親村長・賛成派は1940年代後半と1960年前後に生まれた者で、ほぼ同時期に小学校に通い、今は小学校や中学校に通う子供たちがおり、妻たちは村外で働いていたり働いた経験を持つなど、共通した生活の関心を持ち頻繁に情報交換と議論をしていた（彼ら同士は遠い血縁にあるが、親族としての一体感はない）。彼らの父親たちも彼らの意見に理解を示していたり、反対していてもすでに引退したりしていた。こうして賛成派の場合、父親よりも家族外の近隣関係がチーズ組合の廃止後も相互調整機能を果たし、農民たちの意思決定を支えていたのである。とはいえ賛成派でも実は意思決定の単位は常に家族であり（図-3）、ひとつの家族が異なる派閥に割れることはない。こうした家族の重要性の背後には、GAECと同様に家族同士の間では相互理解がしやすいという信頼感がある。

ここでは、近隣関係から農業情報を得て家族を単位に意思決定を行なっている点で、賛成派も反対派

も違いはない。それではなぜ賛否が分かれたのだろうか。反対派は家族的価値に固執する伝統主義者、賛成派は経済的価値を追求する合理主義者とみられた。しかし実際には、賛成派も反対派を「家族生活のためには交換分合が不可避なのに、時代に適応できず嫉妬している」と家族の重要性を論拠に非難しているのである。ジュラでは「嫉妬」することは恥ずかしく、近隣関係での社会的評判（従って発言力）を失墜させるものなので（三浦、2004、39頁）、この非難は、家族的価値が新世代にとっても重要であり、しかも家族的価値の重視が近隣関係の維持にも不可欠であることを示している。同様に旧世代も、第二次大戦後の高度成長の中で、農業機械化や一定範囲での規模拡大を担ってきた世代として、経済環境の変化の中で経済的価値を重視して農業経営をしてきた農民たちであった。このように、実際には旧世代も新世代もともに家族的価値と経済的価値の両方を重視しており、単純な伝統主義者と合理主義者という色分けは妥当ではない。むしろ彼らの相違は、規模拡大による経営の維持が実現しやすかった、1950年代という高度成長の経済環境への適応の仕方と、経営の舵取りがより微妙となった、1980年代という停滞期の経済環境への適応の仕方の相違という、生きてきた時代の相違だったと考えられる。

このように交換分合への賛否は派閥の中心となる人物の世代差に対応するが、その意見形成はともに親族や隣人の日常的関係に依存するジュラ・モデルの枠内で行なわれ、そこでは家族的価値と経済的価値がともに重視されている。しかしここで、家族的価値と経済的価値の両者の重視は意思決定において矛盾を引き起こさないのか、なぜ現在の経済環境において家族的価値が重視されるのかという問題が生じる。この点を次にみてみよう。

(2) 家族内部での意思決定

ジュラ・モデルにおける意思決定では、家族的価値と経済的価値はどのように結びつけられるのだろうか。交換分合賛成派の農業経営体Gの経営方針を巡る会話例からみてみよう。この会話例は、キャンピングの経営のプロモーションのためのツアー・イベントを企画する弟と農作業を重視する兄、および姉と弟の妻との間でなされた議論の一部である。

ここには3つの特徴がみられる。第1は経済的価値と家族的価値がともに主張されていることである。経済的価値は利益追求の正当性の主張として現われる（4B、13B、15B）（ここでは経済的価値に否

会話例：家族の内部での経営を巡る議論

[農業経営体 G にて、キャンピングに客を呼ぶためのツアー・イベントの企画を巡って]

発言 原語 (フランス語)	日本語訳
1A Et à quelle période?	それで、いつやるの?
2B Ben, le 27, 28, 29 mai.	それは5月27日、28日、29日だよ。
3A Oui, moi, je vous dis, on a du travail, beaucoup de travail alors si tu veux encore faire du travail. Moi, je veux bien que t'en fasses mais moi, si je veux sulfater les bettraves, si je les sulfate pas, qu'est-ce qu'on fait après? Moi, je suis bien d'accord, mais je trouve que tu augmentes les heures de travail. Faut savoir où on arrête, quand on s'arrête.	それじゃあ、仕事があるじゃないか、たくさん仕事があるのにまだもっと仕事したいのか。お前がするのはいいけど、俺はビートに肥料をやらなきゃならない。肥料やらなかったらどうなる? お前の言うことは賛成するけど、それだと労働時間が増えるだろ。どこまでやってやるかははっきりさせないと。
4B Je veux dire, nous, oui, faut travailler.	でもさ、そうだが、俺たちは働かなきゃ。
5A Oui, ben, faut savoir. Je me pose la question.	そりゃそうだが、いったいどうなんだよ。
6B Tu te poses la question de savoir si je veux rester paysan !	農家を続ける気があるのかって聞きたいわけか!
7A Non, je veux savoir...	いや、だからさ...
8C Non, si on investit beaucoup, donc pendant quelques années, bon, ben, t'aimerais peut-être faire que ça.	だからね、毎年そのイベントにお金をつぎ込んでいけばね、多分そのうちそれしかやりたくなるってことなのよ。
9A Oui, mais faut le dire.	そう、でもそういうことだよ。
10C Si tu préfère être en retraite, ou...	あんたがもう農業を辞めたいって言うなら...
11B Mais, non ! J'ai jamais pensé ne pas être paysan. C'est tout ce que vous croyez ?	違うよ、俺はそんなことは全く考えちゃいないよ。みんな、そんなふうに思っているの?
12D Mais non. Chacun a droit de penser ce qu'il veut et d'avoir envie de ce qu'il veut.	そんなことはしないわよ。誰だってしたいことを考えてそれをしようとしていいわけでしょ。
13B Non, tout ce que je veux dire, c'est que, quand on partira en mai, je te dirai combien qu'on gagne.	いや、俺が言いたいのは、5月に行けば、どれだけ稼げるかってことだよ。
14A C'est pas ça qui me bloque, moi. Déjà à l'automne on a du boulot.	俺が引っかかるのはそこじゃないよ。すでに秋にもたくさんの仕事があるだろ。
15B Oui, mais je veux dire, si en ces 4 jours, si en ces 4 jours, si je pars, moi, je gagne 10 millions, je sais.	そう、でも言いたいんだけど、4日間、この4日間もし俺が行けば、1000万を稼げるんだよ。
16A Et ben, t'achèteras les betteraves ? 10 millions !	で、ビートを買うのか? その1000万で!
17B Ben, ma foi ! Qu'est-ce tu veux que je te dise, moi ? Mais, moi, je vais te dire autre chose aussi, si tu veux. Moi, je suis là, j'ai 4 gamins, moi les 4000 francs que je touche à la ferme, c'est mon argent de poche.	なんだよ! 何を言わせたいんだよ? それじゃあ、ついでに言うけど、俺はここに住んで4人の子供がいる。で、農業で (毎月) 4000 フラン貰っているけど、これは俺の金だよ。
18A Oui, mais oui. Je suis d'accord.	そう、でも、そう、その通りだよ。
19B Parce que si j'avais pas ce que j'avais à côté. Faut par rêver. Alors tu vas me dire, oui, mais ce qu'on laisse tomber qu'on fait pas, on toucherait plus. Oui, mais !	もし今あるものがなかったら、夢を言っている訳にはいかないだろ。お前は俺に言うけど、でも、何もしないままでいたら何も稼げないじゃないか。そうだろう!
20D Non, mais, si on pouvait compter à faire plus. Plus hors saisons, faire des fois plus de repas, on pourrait éviter de faire ces temps forts. Ces temps forts nous permet d'augmenter le chiffre. Mais faudrait qu'on puisse faire plus de repas le week-end comme vous voulez où ça dérange un peu moins et on pourrait diminuer les temps forts ! Ces trucs-là, de l'organisation d'avant. C'est du souci, pour nous c'est du souci toute l'année.	そう、でも、もっと何かできれば。シーズンオフにもっと食事を出せたら、繁忙期を避けられるでしょ。繁忙期は数字をあげることができるけど、週末のそんなに大変ではない時期にもっと食事を出せるようにしなくちゃ、そうすれば繁忙期も軽減するでしょ。昔はそうだったでしょ。それが気になっているのよ、年中それがあたしたちの問題なのよ。

A : アルフレッド・G

B : ジャン＝ルイ・G

C : アンドレ・E (アルフレッド/ジャン＝ルイ・G の姉でアラン/イヴ・E の母)

D : プリジット・G (ジャン＝ルイ・G の妻)

(1992年2月12日採録)

定的なアルフレッドも、他の場面では「金を稼がなくちゃ意味がない」「採算が合わなければだめだ」と経済的価値を重視する発言をしている。一方、家族的価値は生産活動の目的が家族生活の維持にあるという示唆(12B、15C)に現われる。他の農民も「俺は家族のために働いているんだ(アルフレッド・G)」「俺には家もあるし妻も子もいる。人をうらやむことなんかないさ(アンリ・F)」と言うなど、労働が家族のためであると強調する。特徴の第2は農業経営における労働量軽減の重要性で(3A、15B、20D)、これは経済的価値に敏感な新世代でも生産拡大は第一目標ではないことを示している。第3は、「そうだが、でも(oui, mais)」(9A、15B、18A、19B)や、「俺はあなたに同意する(Je suis d'accord)」(3A、18A)という頻繁な譲歩表現により(会話例中の網かけ部分)、意見対立がないと常に表明されることである。こうした表現は争いや意見対立を回避して家族の信頼を維持しようとする配慮によっており、意見の相違を解消させる方向での意見形成を促している(この家族の調和はカトリックの理念にも合致する)。

以上のうち、第2と第3の特徴は明らかに家族的価値と結びついている。農業経営が家族を単位に家族労働力を用いる限り、家族関係と家族生活の維持は生産活動の必要条件である。しかし、家族は生産活動とともに子育てやレクリエーションなどの活動も担うため、家族の他の機能を犠牲にして労働を強化することは家族内の協力関係を歪め、生産活動自体を行き詰まらせる。そのため労働の軽減は不可欠なのである。そしてこの協力関係を維持するために、意見の相違を際立たせない表現が必要となり、議論が家族内でなされる限り家族関係を損なわせる判断も回避される。

しかしこのような家族的価値の追求は必ずしも経済的価値とは矛盾しない。既にみたように、家族関係を重視することは土地の確保を安定的に保証し、家族内での農業的知識の伝達を円滑にすることで、コストの低下に貢献するからである。しかも、家族関係を利用してリスクを分散して最低限の収入を確保するほうが、過剰な投資でリスクの高い集約化を進めるよりも安定的な家族生活には望ましい。また、家族的価値を守ることは近隣関係における社会的評判の維持を可能とし、近隣関係を通じた農業経営上の有益な情報へのアクセスと地域協同組織への参加により、生産性向上が実現できるのである。

ジュラの農民たちが家族の重要性を強調するの

は、伝統への固執からではなく、むしろ家族が生活と生産活動の基本条件となっているため、家族を重視することで初めて経済的価値も追求できるからである。そのためジュラでは、中規模経営や粗放的草地利用といった、過重な生産拡大を回避する経営形態が選択されるのである。

(3) 社会的コンセンサス

農民たちがジュラ・モデルを選択するのは、それが家族的価値と経済的価値を同時に実現するからである。しかしそこには同時に、サイレージの禁止のように人々にジュラ・モデルを採用させる圧力も働いている。この圧力でジュラ・モデルは社会的コンセンサスとなり農業経営を同質化させるのである。そこで最後に、ジュラ・モデルが社会的コンセンサスとなるメカニズムを検討しよう。

ジュラ・モデルによる経営は、かつて小規模経営農家だった父や祖父から受け継がれてきた、家族的遺産としての知識に基づいている。現在の子供たちは農業高校で集約化モデルも学ぶが、それを自分の農地で適用しようとするれば、先の会話例のように家族の反発は避けられない。またJacques-Jouvenotも指摘するように、農地を提供しているが農業を継がない兄弟姉妹らも、農業経営は家族的価値を体现する家族遺産であるために、農地の行方には関心を寄せている(Jacques-Jouvenot, 1997, p.63)⁽¹⁴⁾。そのため個々の農業経営者にとって、一緒に暮らす家族や離れて暮らす兄弟姉妹の意向を無視して、その土地の利用法や経営形態を変えることは極めて難しい。

ジュラ・モデルの採用には家族を超えた社会関係も重要である。アラン・Eが「F村にチーズ組合があればそのメンバーになる(すなわちサイレージ飼料は使わない)のは当然だ」と言うように、ジュラの酪農の基礎となる地域協同組織が農家の経営形態に制約をかけるのである。しかもチーズ組合解散後に(酪酸菌の飛散を招く)サイレージを導入した農業経営体Eが、周囲の農民から「あいづらは地域の調和を乱している」と強く反発されるように、近隣関係も互いの経営形態への圧力となっている。近隣の異なる経営形態への反発は、容易に社会的対立に発展し「嫉妬」による感情的な争いとなるため、人々は常に家族内の会話と同様に、対立を回避する表現を頻繁に用いて反発を回避しようとする⁽¹⁵⁾。その結果、F村の村長派の派閥形成にみられたように、近隣・友人関係の間で意見の一致が求められるとともに一定の情報の共有もなされ、経営形態もお

互いに類似していくことになる。こうして近隣関係の中での社会的圧力によって、農民たちは周囲と同様の経営形態を選択していく。そしてまた同時に、近隣や友人同士の経営が類似していれば、土地の貸借や交換も容易となり経営コストの引き下げができる。

家族関係と近隣関係は地域のプライドとも不可分なので、生産物の地域的価値も経営形態に関与する。県の役人は「鶏の糞を牛の餌にやれば草地なしでより効率的な酪農ができる」と言うが、農民たちは「冗談じゃない、それではコンテの品質は台無しだ」と猛反発をする。彼らにとって草地を使わない効率性重視の牛乳生産は、牛乳の品質を劣化させ「俺たちのチーズ」の品質を台無しにするものである。ホルスタイン種の採用も、彼らにとっては「俺たちの牛」の放棄であり生産物の価値を低下させる。このような地域のプライドは、農民たちを集約化モデルの拒否と独特の酪農経営に導いていく⁽¹⁰⁾。

こうして家族関係や近隣関係、そしてそれらと結びついた地域のプライドが社会的圧力となって、互いの生産活動が調整され、ジュラ・モデルによる農業経営という社会的コンセンサスが生み出される。しかも、類似した経営形態・経営規模の農民の間では利害対立が少なくなるため、地域協同組織は一層維持しやすくなってその経済的重要性を高めていく（さらには19世紀のチーズ組合の普及にみられるような産地形成という効果も生む）。そしてこの地域協同組織の存在により、個々の農家のジュラ・モデルによる農業経営も維持が可能となるのである。このようにみえてくると、ジュラ・モデルは多くの農民の間の社会的コンセンサスがあって効果的となる経営形態なのであり、その社会的コンセンサスによってジュラ・モデルは市場経済のもとでも再生産されていくといえることができる。

4. おわりに

近年、市場経済における家族制農業の経済合理性とダイナミズムが見直されてきている（cf. Netting, 1994）。ジュラ・モデルもそうした市場経済に適応した家族制農業の一例である。本論では、市場経済下でなぜジュラの農民たちがジュラ・モデルを選ぶのかを検討してきた。そして、独特の経済的合理性を持つジュラ・モデルは、共同体的伝統への人々の従属からではなく、親族関係や近隣関係を媒介とした生産基盤と情報アクセス条件の下での、個々の農

民の意思決定によって生まれるものであること、そしてその社会的条件がジュラ・モデルを社会的コンセンサスにまで高めていることが明らかになった。

こうした農業経営の背景には、均分相続や核家族、チーズ組合などの地域協同組織といった社会的条件、さらには歴史や宗教的観念などフランス・ジュラ独特の地域的条件がある。そのため、他の地方での大規模化を回避して市場経済に適応した農業では、異なるメカニズムが働いていると考えられる。したがって次は、そうした様々な事例の比較を通して、非資本主義的経営による農業の資本主義経済への適応のメカニズムを、1つ1つ明らかにする必要がある。もちろん、農業は常に動いている経済の中にある。以上で分析したのはあくまでも1990年代初頭までのジュラ農業である。ヨーロッパ農業を巡る環境はそれ以来大きく変化した。その変化の中での農民たちの対応と政策の効果も検討する必要があるだろう。それは今後の課題である。

注

- (1) AOCチーズであるコンテは、その製造法や地域、製品の特徴が政令によって規定されている。牛乳に関しては、1976年3月30日の政令によりモンベリアルド種またはビ・ルージュ・ド・レスト種の乳牛（1998年12月30日の政令でモンベリアルド種とフランス・シメンタル種に変更）の生乳のみを使用し、乳牛は指定地域の草地由来の牧草で育てることとされ、発酵飼料の使用は禁じられている。この規定が生まれた背景には、チーズ組合を核とした19世紀のジュラ農村の独特の発展と、スイスとのグリュイエールの名称を巡る対立があった。
- (2) 第二次大戦までは、F村では多くの農家が近所や親戚の若者が手伝いとして報酬をもらって働いていたが、その雇用も近隣関係や親族関係のつてをたどっていた。
- (3) 年配の女性は女性が外で働くことと家庭を混乱させてよくないと言うが、戦後生まれの女性は女性が家庭の外に仕事を持つのを当然と考えている。これは家計の事情以上に、彼女たちが仕事を持つことを自分の権利と考えているからである。
- (4) フランシュ＝コンテ地方全体では父子によるGAECの数は、1979年は全219中の142、1988年は全490中の179と、父子以外（その多くは兄弟）によるGAECが急増している（Ministère de l'Agriculture et de la Forêt, 1990）。Jacques-Jouvenotは父子によるGAECは世代交代の準備という過渡的なものと指摘する（Jacques-Jouvenot, 1997, pp.87-89）。そして父子以外のGAECの急増は農業経営規模の拡大に伴うものだった（Perrier-Cornet, 1986, p.89）。ジュラのGAECを基礎づける兄弟間の連帯は、中世初期のブルグンド人の慣習が封建制度の下で強化され今日に至ったものであるという（Salitot, 1988, p.182）。
- (5) 財の継承は村ごとに多様性がみられ、父系が重視される

村も (Salitot, 1988, p.159) 双系的になされる村もある (Layton, 2001, p.148)。このようにジュラでは「慣習」はしばしば多様で、このことは日常生活での個々人の意思決定の重要性を示している。

- (6) 現在は農業知識は農業高校で学ぶが、農業高校に進学するのは家族ですでに農業経営の継承者とされ基礎知識を身につけた子供である (Jacques-Jouvenot, 1997, p.34)。
- (7) 相続慣行という点でフランスは大きく南部の一子相続地域、西部の均分相続地域、および北東部の条件付き均分相続地域に分かれる。南部と北東部の境界線はジュラ県の中心部を東西に通っており、F村はこの境界線のやや北部に位置している。
- (8) フランス農村研究では均分相続で分散した土地の再統合戦略 (cf. Pingaud, 1978)、特に親族間で繰り返される結婚という戦略 (婚姻関係の再構築 *renchâinement de l'alliance*) の重要性が指摘され (Jolas, et al., 1990, pp.141-145, Segalen, 1984, pp.117-160)、同様の戦略はジュラでも指摘されている (Salitot, 1988, 148~159, Layton, 2001, pp.153~154)。しかしF村では過去5世代の間では、婚姻関係の再構築も他の土地再統合戦略もみられない。
- (9) 19世紀のチーズ組合の普及で農民たちは現金収入を得たが、同時にチーズ組合に参加できない零細農家は農村から排除された (Mayaud, 1986, p.89)。
- (10) 1992年の統計では、ジュラ県では78の組合で1,238の組合員を数え、平均は15.87人／組合となっている (Ministère de l'Agriculture et de la Pêche, 1993)。
- (11) 共同放牧の慣習が続いていた1950年代まではコミューンも地域協同組織の1つだった。共同放牧は、土地所有権を一時的に反古にして土地へのアクセスを低コストで可能にしたため、ジュラでは20世紀まで続いたが (Mayaud, 1986, p.89)、その際、農民は村という共同体に従っていたのではなく、それに依存しつつも利用していたのである。
- (12) ポリニーの国立乳業学校 (ENILBIO) は、乳業技術の研究と普及のために19世紀末に設立され、現在は研究の他にチーズ技術者のリカレント教育、専門技術者免状BTS課程や学部専門課程・修士課程の教育を行なっている。
- (13) ここにはジュラ特有の事情も関与する。1970年に政府は農業近代化のために「コンテ合意書 *Charte du Comté*」を定め、質を考慮した乳価の決定をチーズ組合に指示しようとした。しかし1972年に農民たちの広範な反対で合意書は破棄されることになった。
- (14) 週末や復活祭などの機会に離れて暮らす家族が集まることで、家族の繋がりや家族的価値が再確認され、兄弟姉妹は実家の農家の経営を絶えず見守ることになる。
- (15) 関係を保つための発言は対立状況でもなされる。たとえば、1992年3月31日のコミューン議会で反村長派議員が村長を厳しく非難した時、反村長派議員 (ドミニク・Hの妻フランソワーズ・H) と村長派議員 (アンリ・F) が次のような会話をした (話題は小学生の通学に際しての安全確保だった)。「[アンリ] あなたにもうひとつ言っておく。ほら子供の安全を言うのなら、安全はな、みんなの問題だろ (Je vais te dire encore quelque chose, tu vois. Quand tu parles de sécurité des gamins. Et, ben la sécurité, il

faut l'avoir pour tout le monde, hein?)。」「[フランソワーズ] それで? 続けてよ、聞いているから。だからあなたの話を聞いているのよ。あなたは私の話を聞いているでしょ、私もあなたの話を聞いているのよ (C'est-à-dire? Continue, je t'écoute. Non, mais je t'écoute. Tu m'écoutes, tu m'écoutes, je t'écoute!)。」「近隣関係でも会話で相手の異論に配慮する態度の表明は必要で、そうした態度を示さないと「失礼だ (C'est pas gentil)」[嫉妬している (Il est jaloux)] と非難される (cf. 三浦, 2004, 39頁)。

- (16) コンテの製造では、化学肥料の投入などによる集約的経営はAOCに関する政令により制限されており (さらに1998年12月30日の政令で1ha／頭以上の草地も必要となる)、それがジュラ・モデルを支えている。こうした規定は元来、ジュラ・モデルの維持を望んだ農民たちの政府への働きかけで生まれたものである。

参考文献

- ブロック・M., 1959, 『フランス農村史の基本性格』, 河野健二・飯沼二郎訳, 創文社。
- Jacques-Jouvenot, D., 1997, *Choix du successeur et transmission patrimoniale*, Paris: L'Harmattan.
- Jolas, T., et al., 1990, «Parler famille», in T. Jolas et al. *Une campagne voisine*, Paris: Maison des Sciences de l'Homme.
- Laslett, P., 1972, La famille et le ménage: approches historiques, *Annales ESC*, 27 (4-5) : pp.847-872.
- Layton, R., 2001, *Anthropology and History in Franche-Comté*, London: Routledge.
- Mayaud, J.-L., 1986, *Les secondes républiques du Doubs*, Paris: Belles Lettres.
- Ministère de l'Agriculture et de la Forêt, 1990, *Recensement agricole 1988, Jura: principaux résultats*, (no. d'Agresta: la statistique agricole - Jura, no.1 septembre), Lons-le-Saunier.
- Ministère de l'Agriculture et de la Pêche, 1993, *Les chiffres du lait 1992, Franche-Comté, l'année laitière*, (no. spéc. d'Agresta: la statistique agricole - Franche-Comté), Besançon.
- Netting, R. McC, 1994, *Smallholders, Householders*, Stanford: Stanford University Press.
- 三浦敦, 1998, パノパ・マクシム の葬儀、民族学研究、62 (4) : 441-469頁。
- 三浦敦, 2001, 環境資源と社会形成、民族学研究、66 (1) : 1-25頁。
- 三浦敦, 2004, ユートピアのヨーロッパ、森明子編『ヨーロッパ人類学』、新曜社、28-43頁。
- Miura, A., s.d., *Role of Cooperatives in the Modern Market Economy*, manuscript.
- Perrier-Cornet, P., 1986, Le massif jurassien, *Cahiers d'économie et sociologie rurales*, 2: pp.61-121.
- Pingaud, M.-C., 1978, *Paysans en Bourgogne*, Paris: Flammarion.
- Salitot, M., 1988, *Héritage, parenté et propriété en Franche-Comté du XIIIe siècle à nos jours*, Paris: A.R.F./L'Harmattan.
- Segalen, M., 1984, *Quinze générations de Bas-Bretons*, Paris: Presses Universitaires de France.